

## ドラッカー

2022. 2. 14

ドラッカーと言えば、経営学者であり、マネジメントの生みの親である。『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』という本が世に出たことにより、ドラッカーという名前とマネジメントという言葉が一気に認知されるようになったと記憶している。

今でも、ドラッカーの本を読むことがある。『プロフェッショナルの条件』という本がある。そこには、二十歳そこそこでドイツの有力紙の記者となった若きドラッカーを鍛える編集長の姿が伝えられている。

毎週末、私たちの一人ひとりと差し向かいで、一週間の仕事ぶりについて話し合った。(中略) 編集長はいつも、優れた仕事から取り上げた。次に、一生懸命やった仕事を取り上げた。その次に、一生懸命やらなかった仕事を取り上げた。最後に、お粗末な仕事や失敗した仕事を痛烈に批判した。

ここからは、人を批判するのではなく、「仕事」に焦点を合わせる。高い成果の基準を設定し、鍛え上げた編集長の姿が目につく。日々の仕事の積み重ねの上にリーダーシップは育まれ、やがて優れた組織の文化が醸成されていく。『マネジメント』には、以下の記述がある。

マネジメントとは、科学であると同時に人間学である。客観的な体系であるとともに、信条と経験の体系である。

自分の仕事を振り返ってみた。果たして、優れた仕事と言えるものはあったのか。一生懸命やった仕事がどのくらいあったのか。一生懸命やらなかった仕事はなかったか。お粗末な仕事はないか。失敗した仕事はいくつくらいあったか。

我がことながら、実に心もとない。このような振り返りを毎週やっていたら、かなり仕事ぶりが違ってくるだろうと思う。その一方で、かなり落ち込む結果にもなるだろう。

以前、お世話になった方に教えてもらった。「仕事とは創造性を伴うものである。いつも同じことをやっているのはルーティンにすぎない」学校の場合は、ルーティンを確実にやっていくことも大切なことである。だが、創造性を伴わなくなると危険である。前年度踏襲、例年通りに陥る。

ちょっと前までは、マネジメントというものは、学校にはなじまないのではないかと考えていた。ところが、瞬く間に学校にも根付いた感がある。マネジメントサイクル、カリキュラムマネジメントなどと、普通に使うようになった。

今年度も、残り一月半である。ドラッカーを鍛えた編集長のようにはいかないが、自分の仕事は何か、仕事と言えるものをどのくらいできているのか。我が身を振り返ってみようと思う。仕事をやってきたつもりが、実はそうではなかったことに気付かされることになるかもしれない。学校の先生も、ドラッカーから学ぶことは多い。